慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カール・クラウスとアドルフ・ロース : 世紀転換期ウィーンにおける「装飾」批判とその意味
Sub Title	Karl Kraus und Adolf Loos - Ornamentkritik im Wien der Jahrhundertwende
Author	高橋, 義彦(Takahashi, Yoshihiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会
Publication year	2013
Jtitle	法學政治學論究 : 法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.98, (2013. 9) ,p.71- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20130915-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カール・クラウスとアドルフ・ロース
――世紀転換期ウィーンにおける「装飾」批判とその意味――

高橋義彦

一　はじめに
二　アドルフ・ロースの「装飾」批判
三　カール・クラウスの「装飾」批判
四　まとめ

一　はじめに

カール・クラウスとアドルフ・ロースの二人は「世紀末ウィーン」を語る上で欠かすことのできない登場人物である。片やドイツ、オーストリアに蔓延るありとあらゆる腐敗に噛み付き、舌鋒鋭い批判を浴びせかけた稀代の諷刺家にしてジャーナリスト、片や王宮の真向かいに無装飾の建物（「ロース・ハウス」）を設計し、歴史主義的な建築物に

彩られたウィーンを「ポチョムキン都市」[1]と嘲弄して憚らなかった建築家にして文化批評家。この二人の「アンファン・テリブル」は、世紀末ウィーン文化を論じる際に好んで取り上げられてきた[2]。ウィーン文化論において、クラウスとロースを、バロック的伝統の後裔（＝「唯美派」）に対抗する啓蒙的伝統の後裔（＝「倫理派」）とグループ分けするカール・E・ショースキーや、ロース＝シェーンベルク＝ウィトゲンシュタインといった文化的アヴァンギャルドを、一括して「クラウス主義者」として論じるアラン・ジャニクとスティーブン・トゥールミンの研究はその代表的な例といえよう[3]。

両者がこのようにまとめて論じられることにいわれがないわけではない。世紀末ウィーン研究の文脈において考えてみると、クラウスとロースは共に、既成のウィーン市民社会に対すると同時に、彼らの同世代の唯美主義者たちに対するラディカルな批判者であった。この両戦線において二人はいわば共闘関係にあり、クラウスはロースを擁護する論文を彼が発行していた個人誌『ファッケル』に何度も掲載しているし、また彼自身の時代批判を展開する上でもロースに繰り返し依拠している。ヘルマン・バールやフーゴー・フォン・ホフマンスタールといった文学者、ヨーゼフ・オルブリッヒ、ヨーゼフ・ホフマンといった建築家・デザイナーに代表される唯美主義的な文化とは異なる、同時代のウィーン文化のもう一つの側面、すなわちその「批判的」側面を捉えようとするならば、クラウス、ロースといった当時の文化アヴァンギャルドに対する着目が必要となるのである。

また伝記的事実からも二人の関係の深さは伝わってくる。ロースはクラウスにとって数少ない生涯にわたる友人であった。その批判的舌鋒の鋭さゆえに当初の友好関係が崩れ、後にクラウスと敵対関係に陥った友人、知人は数多いのだが、クラウスとロースの友情関係が決定的に壊れることはなかった。クラウスは兄弟の家のデザインをロースに委託するなど経済的な援助も行っていたし[4]、ロースが一九三三年に亡くなった際、弔辞を読んだのは他ならぬクラウスであった（F888: 1-3, 1933）。一方でロースも、一九一三年にクラウスがカトリック教会に入信した際の代父を務

めるなど、両者の関係は「持ちつ持たれつ」であったといえるのである。[5]

しかしこのように共闘関係が指摘されることの多い両者ではあるが、従来同列に並べて論じられることの多かったこの二人の思想の差異を指摘する研究もいくつか存在する。[6] そうした研究においては、クラウスとロースにとって「共通の敵」――前世代の守旧派と同世代の唯美主義者――が世紀末ウィーンに存在したことは事実であるとしても、彼らの議論の枠組みや、目指した社会像には相違点が数多く見られることが強調されるのである。本論の目的は、こうした先行研究に基本的に依拠しながらも、両者の議論を政治・社会（学）的側面と心理（学）的側面から整理しなおし、その比較作業を通じてクラウスとロースの相違点をより明確にすることにある。さらに二点目の心理（学）的側面の検討にあたっては、クラウスと交流のあったフロイトとの比較も行った。クラウスとロース、さらにフロイトの思想上の差異を論じることで、世紀末ウィーンにおける文化アヴァンギャルド思想の多様性を見出す一助としたい。とりわけロース、フロイトとの比較を通じ、「市民的啓蒙」の後継者と簡単には分類しがたいクラウスの時代批判の論理を明らかにするとともに、そうした彼の一貫した論理が後の一次大戦批判へと連続的につながっていくことを示唆する。

結論を先取りしていえば、「政治・社会（学）」的側面において、ロースが西洋諸国（特にアメリカとイギリス）の進歩した政治文化を高く評価し、そこを基準としてオーストリアの「後進性」を批判したとすれば、クラウスには――一部ロースと同じような議論の展開は見られるものの――オーストリアを含めた西洋諸国一般の進歩を「堕落」として捉える文化ペシミズムの傾向が強く見られる。また「心理（学）」的側面においては、ロースが「装飾」――これはロースの文化批判のキーワードである――を未発達な人間の「抑制なき衝動」の発露として捉え、芸術を「衝動の抑制」の結果生まれた高度な文化と考えていたとすれば、クラウスは進歩した西洋市民社会の「衝動の抑圧」による退行現象として「装飾」を捉え、むしろ「衝動の解放」に装飾とは区別される芸術の根源を見出していた。

本論では、第二章においてアドルフ・ロースの思想を彼の代表的論稿といえる「装飾と犯罪」を中心に論じ、第三章ではクラウスのロース論を紹介した上で、第二章でまとめたロース思想と比較しながらクラウスの思想を論じ、両者の思想の相違点を明らかにしたい。両者の影響関係が特に顕著に見られるのは二〇世紀冒頭の十数年であるため、本論においても特にこの時期のテキストを中心的な検討対象とする。

二　アドルフ・ロースの「装飾」批判

ロース思想の内容検討に入る前に、簡単に彼の生涯について紹介しておこう(7)。アドルフ・ロースは一八七〇年に石工の息子としてモラヴィアのブリュンに生まれた。彼はクラウスと異なりユダヤ系ではないが、クラウス同様もとは現チェコ領出身の非ウィーン人であった。ギムナジウム、ドレスデンの王立工科大学を経て、一八九三年から三年間をアメリカで過ごした。帰国後は建築デザイナー、文筆家として活動を始め、早くも一八九八年にはウィーンを代表する日刊紙『ノイエ・フライエ・プレッセ』で連載を持っている。建築デザインの分野でも「カフェ・ムゼーウム」（一八九九年）、「ケルントナー・バー」（一九〇七年）などの作品を生み出し、一九一〇年にはウィーン中を議論の渦に巻き込んだ「ロース・ハウス」を設計した。また同年にはウィーンやベルリンで講演会を開催し「装飾と犯罪」を朗読している。一次大戦後は「赤いウィーン」として知られる社会民主党主導の市政運営に一時携わり、同党の住宅政策に関わった。その後パリへ移住し、ダダイストとして知られるトリスタン・ツァラの住居などを手がけた。一九三三年にウィーンで死去。

彼の文筆作品は生前に刊行された、初期著作集『虚空に向けて語る』（一九二一年）と「装飾と犯罪」を含め多くの論稿を集めた『にもかかわらず』（一九三一年）、さらに一九八〇年代になってから編集・刊行された『ポチョムキン

都市』（一九八三年）の三冊にまとめられており、邦訳も一部存在する。[8]

ロース思想を論じるにあたっては、彼の代表作といえる「装飾と犯罪」[9]の内容を紹介することから始めたい。同論文は世紀末ウィーン研究において必ずといってよいほど言及されるものであるが、ロース論を展開するにあたってロース思想のエッセンスを知るためにもこの論文の理解は不可欠と思われるからである。

同論文の冒頭で、ロースはヘッケル流の進歩主義的な文化観を披露する。すなわち胎児が母親の胎内で生物の発展段階を経験するように、子どもは生まれた後も二歳のときはパプア人、四歳で古代ゲルマン人、六歳ではソクラテス、八歳ではヴォルテールと人類文化の発展段階をたどり、そして大人になって現代人に至る、とロースは主張するのである。ロースにとって同時代のオーストリアの政治文化の問題とは、オーストリアがいわばこの「パプア」的段階にとどまっている、ということにあった。

では果たして、文化の進歩とは何を基準に計ることができるのであろうか。ここでロースが持ち出すのがこの講演のタイトルでもある「装飾」というキーワードである。ロースにとって「文化の進化とは日用品から装飾を取り除くということと同義」である。[10]彼の生きる近代ヨーロッパ社会にあって、自分の家、持ち物に装飾を施し、あまつさえ自分の身体にまで装飾（ロースはタトゥーを強く批判している）を刻み込む者は「犯罪者か、それとも変質者」に他ならない。それゆえ装飾とは、近代ヨーロッパにおいては、「後進性」を示す「退廃現象」である。ロースはあたかも預言者のようにこの講演原稿の中で次のように聴衆に呼びかける。

> 泣くな、見よ。われわれの時代には、新しい形の装飾が生み出されないからこそ、われわれの時代が偉大なることの証なのではないか。われわれは装飾を克服したのであり、装飾がなくとも生きていけるようになったのである。見よ、それが完全に実現される日は目前に迫っているのだ。まもなく、都市の街路という街路が白壁のように光り輝く日が来ることだろう。聖なる都市、

天国の首都シオンのように光り輝く日が[11]。

ロースにとって「装飾」が文化的後進性の現れだとすれば、「無装飾」こそ文化の進歩の現れであり、「精神力の証」なのである[12]。この一見極端な進歩主義的議論で果たしてロースは何を主張しようとしたのであろうか。

第一に、ロースの「装飾」批判の政治・社会学的な意味とは、オーストリアの「後進性」に対する批判であった、といえる。「装飾と犯罪」という論文はもともと講演原稿で、ロースは一九一〇年一月にウィーン、三月にはベルリン、一二月にはミュンヘン、さらに翌年三月にはプラハ（同講演にはフランツ・カフカも参加している）[13]、といった中欧諸都市において朗読した[14]。そしてこの時期のロースにとって最大の懸念事項は「ロース・ハウス」をめぐるスキャンダルであった。この具体例を参照しながら、「装飾と犯罪」が書かれた時代背景を見ていこう。

ロースは一九〇九年にウィーン中心部のミヒャエラー・プラッツにある紳士服店「ゴールドマン&ザラチュ」にデザインを委託され、大理石に被覆された下層階と、真っ白で平らな上層階からなるきわめてシンプルな建築物を設計した。しかし翌一九一〇年九月には、そのデザインの無装飾性ゆえに、市当局から工事の中止命令が出されてしまう。王宮の真向かいにこのような無装飾の建築物を作ることは「不敬である」と考えられたのだ[15]。最終的にロース側がデザインについて多少の妥協することで一九一二年には認可が下りるものの、この建築物をめぐる論争は約二年間ウィーンをにぎわすこととなった。「装飾」の批判者ロースは、ウィーンにあっては、そのデザインの「無装飾」性ゆえに非難されたのである。

この「無装飾」の主唱者ロースと「装飾」の擁護者である市当局、ひいてはハプスブルク帝国の対決は、「装飾と犯罪」の文脈でいえば、「現代人」ロースと「パプア的」段階にあるハプスブルク帝国の対決を意味していた。もちろん「装飾と犯罪」それ自体は「ロース・ハウス」問題が生じる以前に書かれたものであり、「装飾」の除去を文化

の進歩と見るロースの文化史観は一九世紀末まで遡ることができるものである。[16] しかし「ロース・ハウス」問題が生じた後である一九一〇年一二月のベルリンでの講演「建築について」において、ロースは「文化の進化とは日用品から装飾を取り除くということと同義である」という「装飾と犯罪」のキーセンテンスを一言一句変えることなく繰り返して自説を展開し、自らの建築物を擁護した。[17] ロースにとって、「ロース・ハウス」をめぐる市当局とその背後にあるハプスブルク帝国との対決とは、一九世紀末以来の自らの思想信条をめぐる争いの顕在化を意味していた。彼のいささか極端な進歩主義は、ハプスブルク帝国の後進性へのこの対決意識から生じたものと考えるべきなのである。「装飾と犯罪」の中でロースは、ハプスブルク帝国を「国民の文化的発展に歯止めをかけることを自己の務めと心得ている国家」と揶揄する。[18] ロースは一八九三年からの三年間をアメリカで暮らし、[19] そこからの帰国途上でロンドンとパリにも滞在経験があった。彼は自らのこの西洋経験から「東の国」オーストリアの後進性の批判を、「装飾」というキーワードを軸に行ったのである。

例えばロースは一九〇二年に自ら発行した雑誌『他者』に、「西洋文化をオーストリアに導入するための小冊子」という副題を与えている。[20] アルフレート・プファビガンが指摘するように、ロースにとっての「シオン」とは西洋を意味し、彼にとっての「オーストリア的なもの」とは克服さるべき何ものかに過ぎなかった。[21] 「西洋文化の中心はロンドン」にあった。[22] それゆえロースの議論の端々には、頻繁にアメリカ、イギリスとオーストリアを比較する議論が見られる。彼はより進んだ、現代的なアメリカ、イギリスの文化の視点から、後進的なオーストリア文化を批評している。[23] それゆえクラウスもロースを「反ウィーン人」(F363-365: 4, 1912)、「よきアメリカ人」(F329-330: 10, 1911)と呼んでいたくらいである。

カール・E・ショースキーは彼の主著『世紀末ウィーン』において、オーストリアにおける市民革命の挫折、市民層の美的領域への撤退と貴族文化への同化を軸に世紀末ウィーン文化を論じたが、[24] プファビガンが言うように、ロー

スの試みとは、同時代の彼の支持者にとってまさに「美的領域における市民革命の追体験」[25]を意味していた。ロース本人も自らの建物を「市民的建築物」と呼んでいる[26]。たとえそれが美的領域に過ぎなかったとしても、ロースはそこで旧体制に闘いを挑んだ。そしてロースにとって政治、経済、文化におけるオーストリアの後進性の象徴こそが「装飾」であった。それゆえ装飾におぼれるオーストリアは、ロースの議論のロジックにおいて、後進性、退廃、病的、未開、野蛮といった負の記号を背負うことになるのである。

ではなぜこうしたオーストリアの「後進性」批判を、ロースは「装飾」批判という形で行ったのだろうか。この点に関し重要なのが、彼の思想が持つ「心理（学）」的な意味である。彼は建築物や日用品に装飾を施すことを強く批判したが、一方で芸術作品は高く評価した。ロースは「だがわれわれには芸術がある、装飾は必要ない。われわれは、一日の仕事を終えた後、ベートーヴェンやトリスタンを観賞しに行く」と主張する[27]。ロースは実用が目的である日用品から装飾を剥ぎ取ることを是とし、芸術を日用品の領域から独立させようとした。それゆえロースは、実用性が求められる通常の建築は芸術とは関係がないと述べ、芸術としての建築が成り立つのは「墓碑と記念碑」のみだ、とまで主張している[28]。この日用品に装飾を刻み込むこと（極端な例では身体の装飾としてのタトゥー）の否定的評価と、自律化された芸術の肯定的評価の区別はどこから生じるのであろうか。

この評価の相違が生じる理由を理解するには、ロースが装飾、あるいは芸術の起源をどこに見定めていたのかを考慮に入れなければならない。ロースによると、その起源とは「内なる衝動」である。この衝動が未分化に装飾の形で露出するのが低次の文化であるとすれば、それが抑圧、昇華され芸術作品として形象化されるのが高次の文化である。ロースは次のように言う。

自分の顔を飾り立てたい、そして自分の身の回りのもの全てに装飾を施したい。そうした衝動（Drang）こそ造形芸術の起源で

ある。それは美術の稚拙な表現だともいえよう。また芸術は全てエロティックなものだ。[29]

ロースが建築物、日用品への装飾やタトゥーを非難するのは、この内なる衝動が日常生活のあらゆる局面に垂れ流される「慎みのなさ」に向けられたものであった。[30] ここまでの引用からも読み取れるように、ロースは現代という時代の偉大さ、そして現代人の個性の強さを高く評価している。進歩した高次の文化段階に住む現代人はもはや装飾によって個性を示す必要はない。ロースは「放縦な衝動遊戯（すなわち道徳的自己喪失）への没入」よりも「過剰装飾の去勢（すなわちエロティックな自己切断）」をよしとする。[31] それゆえ現代においてもなお装飾を求めるものは、未分化な形の内なる衝動を垂れ流す、その精神性の弱さを非難されることになる。

このように文化の起源に「衝動」を見るのは、「欲動（Trieb）の抑え込み」こそ文化の起源[32]とする同時代のジークムント・フロイトの議論と並行するものといえる。[33] 例えば『文化における居心地の悪さ』の中でフロイトは次のように主張している。

> 文化とはそもそも欲動断念（Triebverzicht）の上に打ち立てられており、さまざまの強力な欲動に満足を与えないこと（抑え込み、抑圧、あるいはほかにも何かあるかもしれない）こそが文化の前提である。[34]

フロイトはこの一例として人間による火の獲得を挙げ、自然に燃えている火を排尿行為で消すという性的欲求を断念し、火を持ち帰ることで、「火の馴致」という「文化的偉業」が成し遂げられたと主張する。[35] フロイトは芸術に限定することなく、人間の文化的行為一般（フロイトは「文化」を「人間に役立つ活動や価値のすべて」と定義している[36]）が、欲動の断念に基づくということを精神分析学という形でロースと同時代に提示していたのである。

またロースによる「衝動露出＝装飾」批判は建築物の壁面だけではなく、人々の服装の「モード」にも向けられた。ロースは「女性のモード」[37]という文章において、従来女性のモード――服装という装飾――は男の欲情を基準に展開してきたと論じる。つまり古い男性優位社会の中では女性の地位がどのような男と一緒にいるかということで決まる以上、そうした男の愛を獲得するために女性はモード――それを作り出すのは男の欲情をかきたてるプロたる「高級娼婦」である――に従った服装をしてこなければならなかった。より有利な結婚のために女性たちは男の性衝動に（ロースは「病んだ性衝動（krankhafte sinnlichkeit）」と呼ぶ[38]）アピールすることを強いられてきた。そしてロースはこの議論においても、文化のレベルは装飾の有無によって計られることを繰り返した上で、もはや女性が衝動＝装飾に左右される時代は去りつつあるとして、次のように主張する。

> しかしわれわれは今、新しい偉大な時代を迎えているのだ。もはや男の性衝動へのアピールではなく、労働によって獲得した経済的独立によって、女性は男性と対等になるのだ。女性の価値が、時代によって変化していくエロスのありように左右されることはなくなる。[39]

このように、ロースは女性の解放も「装飾」からの解放として捉えていた。第三章でクラウス思想との相違点として詳しく論じることになるが、ロースの議論において女性の解放とは、リベラリズム的な解放、女性の社会的・経済的解放を意味し、男性と同じ地位を女性が獲得することを含意していた、ということができるのである。[40]

さて、ここまで見てきたように、ロースの議論は極めて禁欲的な色彩を帯びている。ロースの議論、彼のデザインしたロース・ハウスは、それを読み、見る人々にある種の精神的な緊張感を与えるものであるといえる。テオドール・W・アドルノもロースの論調にある「ピューリタン的傾向」、ある種の「強迫観念」を指摘する。[41]「泣くな、見

よ」という彼の命令形の文章からも読み取れるように、預言者ロースはウィーンの人々に「黄金の子牛」たる装飾との決別を迫った。それに対しウィーン市民は、ロース・ハウスをめぐる論争に見られるように、拒絶反応を示したのである。

この点について、例えば田中純はウィーン市民のロース・ハウスへのパニック的な反応を「自分自身の克服されない欲望とより直接的に向かい合うこと」を余儀なくされたことに由来すると説明する[42]。装飾がないということは衝動がなくなったということを意味せず、それが抑圧されていることを意味するに過ぎない。それゆえロース・ハウスの無装飾の壁の表面には「欲望の去勢の刻印」があると田中は主張する。ウィーン市民はロース・ハウス壁面の装飾の「欠如」を見せ付けられることにより、逆に自己の欲望、衝動を過度に意識させられることとなった、というわけだ。

同じように心理学的観点からロース批判を展開しているのが、ロースよりも数世代後のオーストリア人芸術家フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサーである。彼は現代建築に特徴的な直線や平面に象徴される、過剰な装飾（＝欲動）の抑圧を、むしろ現代人の精神病理の原因として批判している。そしてその代表的人物としてロースを批判し、一九六八年に発表した自らのマニフェストのタイトルを「ロースからの解放（Los von Loos）」と名づけている。そしてロースの思想を換骨奪胎して合理主義的建築こそが「犯罪的」であると主張するのである。少々長い引用であるが、フンデルトヴァッサーは次のように主張している。

皆さん！

オーストリアからこの建築＝犯罪が世界へと広がっていきました。ですからこの地から償いがなされねばなりません。

オーストリア人アドルフ・ロースは、この被害を一九〇八年以来、気のきいた彼のマニフェスト「装飾と犯罪」によって世界に広めたのです。確かに意図は良いものでした。

> またアドルフ・ヒトラーも良い意図を持っていました。しかしアドルフ・ロースは五〇年を予見する能力がなかったのです。彼が呼び寄せた悪魔はもはや世界を去ることはないでしょう。
> 六〇年前にオーストリアから始まった不運をここで、まさにここで初めて認識し、戦うことが、私の、われわれの義務なのです。
> （中略）
> 直線は真の悪魔の道具です。それを用いるものは人類の没落に手を貸しているのです。没落はどのようなものでしょうか？その先触れをわれわれはすでに得ています。ニューヨークのあらゆる街区には一〇から一二の精神科医がいます。病院は満員ですが、心病んだ人が癒えることはありません。なぜならその病院もロースに従って建設されているからです。(43)

フロイトが欲動の誤った抑圧、支配的な文化的性道徳による性生活の抑圧を神経質症の原因と捉えたように、(44) フンデルトヴァッサーはロース・ハウスに見られるような無装飾建築（装飾＝欲動の抑圧）を現代人の心の病の源と考えたのである。

本章の議論をまとめると、ロースの「装飾」批判とは、その政治・社会学的な含意として、より「現代的」なアメリカ、イギリスを基準とした「オーストリアの後進性」への批判を、そしてその心理学的な含意としては、「衝動の露出」としての「装飾」への批判、そして「衝動の昇華」としての「芸術」の評価を意味していた。日用品や身体に装飾を施すことは「パプワ人」や「インディアン」、西洋人の子どもにはふさわしくとも、西洋人の大人にはふさわしいこととはいえない。装飾を施し、衝動を露出させる者は、ロースによって犯罪者か変質者と断罪される。こうした意味でロースの議論は、理念型化された意味での「白人＝男性＝市民社会」を中心とするロジックで展開しているということがいえるのである。

それでは果たしてカール・クラウスはこうしたロースの議論をどのように読み、自らの議論に取り入れていったのであろうか。次章ではクラウスのロース論を検討した上で、クラウスの議論が持つ政治・社会学的な含意と心理学的な含意を検討し、それがロース思想とは異質な点を内包していることを示したいと思う。

三　カール・クラウスの「装飾」批判

それではまず『ファッケル』誌上におけるロース論を見ていこう。『ファッケル』では、特に一九一〇年前後から一次大戦前にかけて、ロースの装飾批判、それを具現するものとしてのロース・ハウスに対する熱心な擁護論が展開された。ロース・ハウスの擁護のために、クラウスは論争の最中である一九一〇年一二月に自ら「ミヒャエラー・プラッツの建築物」（F313-314: 4-6, 1910）を、翌年二月にはオットー・シュテッセル（ロースは彼のアパートメント・ハウスをデザインしている[45]）による同じタイトルの論説（F317-318: 13-17, 1911）を『ファッケル』に掲載した。

その中でクラウスは、ロースがミヒャエラー・プラッツに建てようとしたものは一つの「思想」であったとロースを評価し、彼の「合目的性（Zweckmässigkeit）」という思想に対してウィーン市民の「凡庸さ（Mittelmässigkeit）」が反抗を行っていると強く反論している（F313-314: 5, 1910）。またシュテッセルもロース・ハウスの「単純性と自明性（Einfachheit und Selbstverständlichkeit）」を評価し（F317-318: 13, 1911）、「商家や住居は、その実用的な目的を最も単純な方法で満たすという以上のいかなる義務も持たない、といってもよかろう」と主張する（Ibid.: 15）。さらにシュテッセルはロースについて、「装飾に対する闘いを、自身の真の人生の課題、仕事」とみなしている人物だと評価し、ロース・ハウスとは「ヨーロッパではすでにいたるところに何の異議もなく建てられ、その単純さゆえに歓迎されている大都市の商家」であると擁護する（Ibid.: 16）。そしてロース・ハウスを批判する市当局に対しては「ウィーンは

一〇年ごとに一歩ずつ、西洋へと前進する代わりに、東洋へと後退している」と批判を加える（Ibid.: 16）。両者ともにロース思想とそれを体現するロース・ハウスを合目的性や実用性といった言葉で擁護し、シュテッセルはそれを前章で強調したロースの西洋志向、進歩主義を交えながら論じているといえよう。

このロースの進歩主義的な側面を、クラウスは「ライオンの頭、あるいは技術の危険」（F384-385: 1-7, 1913）[46]という『ファッケル』の別の論説で称賛している。これは、「街路を走るバスの振動のせいで建物の装飾が緩み落下する危険性があるから、（装飾を守るために）バスの運行に規制をかけたほうがいいのではないか」、という内容の当時の新聞記事をもとに書かれたクラウスの諷刺的なエッセイである。表題にある「ライオンの頭」とは装飾のことであり、「技術」とはバスを意味する。この「技術と唯美的なものの抗争」に関し、クラウスは読者にロースを想起させることで、技術による装飾の克服の必要を説くのである。クラウスはロースの名こそ挙げないものの、「美をタブラ・ラサに戻すミヒャエル・ハウスの建築者にして、人間の形をしたバス」を「行政当局」と対比的に論じ、「人間の形をしたバス」に軍配を上げる。技術＝バス＝ロースが装飾＝市当局に打ち勝つことをクラウスは支持するわけだ。そしてエッセイの末尾を「私はタブラ・ラサをもたらすことができる。私は街路を掃き、髭[47]をはずし、装飾を剃る」と結ぶのである（Ibid.: 7）。ロースを「タブラ・ラサの建築家」（F300: 24, 1910）と呼ぶクラウスは、ここで自身とロースとを同一視しているといえる。また二人の共闘関係を示すものとしては、次のクラウスのアフォリズムがよく引き合いに出される。

> アドルフ・ロースと私は、彼は文字通りに、私は言葉において、壷と便器の間に区別があるということ、そしてこの区別の中に初めて文化のための空間ができるのだということ以上のことは何も示していない。他の人、実際主義者はしかし、壷を便器として使うものと、便器を壷として使うものに分かれる（F389-390: 37, 1913）。

クラウスはこのアフォリズムにおいて、芸術品の日用品化、あるいは日用品の芸術品化を批判し、建築という現場で文字通りに実用的な建築物から装飾を剝ぎ取るロースの営みと、言葉において事実からそれを歪める常套句（言葉における装飾）を剝ぎ取ろうとする自らの営みの共通性を語っているのである。両者の目的は実用的な日用品あるいは事実を伝える報道と芸術の領域を峻厳と区別し、後者の領域の自律性を守ることにあった。

ロースの議論が、単に進歩主義の礼賛、実用性の称揚、装飾の否定として読まれることが多かった中で、このクラウスのロース擁護論からは、クラウスがロースの真の意図をより深く読み込んでいたことがわかる。クラウスによれば、ロースは「パルジファルのモティーフ」と「自動車のクラクション」を区別しようとしたが、それはパルジファルのモティーフ（芸術）を解放するためであったのに、「愚かな思考」はそれを自動車のクラクション（技術）を解放するためと誤解した（F363-365: 4, 1912）[48]。つまりクラウスはロースの装飾批判を、あくまで実用品に付加された「偽の装飾」の批判として読み取り、その意図は技術礼賛ではなく、芸術作品の「純粋性」を守るためのものであったと解釈しているのである[49]。それゆえクラウスからすれば、ロースの進歩主義とはウィーンにおける偽の装飾を批判するという文脈でのみ許容される議論であったということができるのである。

そして同じ「装飾」批判を行っていたとしても、ロースのいう装飾とクラウスのいう装飾に違いが見られることも指摘しておかねばならないだろう。先に見たようにロースにとっての「装飾」とは建築物や服装、人間の皮膚に施される「文字通り」の装飾であって、その否定こそが文化の進歩を意味していた。それに対しクラウスが問題にしたのは「言葉」における「装飾」であって、それはクラウスの批判対象であるプレスの常套句（Phrase）を意味していた。クラウスは「常套句は精神の装飾である」（F279-280: 8, 1909）と述べる。

クラウスの常套句批判の意味とは、伝えられるべき事実がプレスの常套句によって歪められて伝えられ、その歪んだ現実が「現実」として定着するという、マス・コミュニケーション・テクノロジーのイデオロギー作用を問題とす

るものであった。大規模なマスコミが登場することによって、装飾されたイデオロギー的言語が拡散され、装飾された事実が事実として定着してしまうことをクラウスは時代の最大の問題と考えていた。ロースにとっての装飾批判が建築物から装飾を取り外すことであったとすれば、クラウスにとっての装飾批判とはイデオロギー的言語からそのイデオロギーを取り外すという営みであった（この装飾＝イデオロギー言語批判は、恣意的な報道やロマン化された戦争賛美を鋭く批判したクラウスの一次大戦論において大きな役割を果たすことになる[50]）。ここからクラウスの装飾批判は、ロースのような進歩主義的方向ではなく、むしろプレス、マス・コミュニケーション・テクノロジーを生み出した西洋近代、進歩そのものの批判へと向かうのである。

　このことは当時のクラウスの議論の政治・社会（学）的な含意を見るとより明らかとなる。クラウスは一九一〇年前後に進歩に関する自身の見解を様々な場面で明らかにしている。例えば文字通り「進歩」（F275-276: 33-40, 1909）[51]と題されたエッセイでは、クラウスは進歩を「変転する装飾（Wandelsdekoration）[52]」と定義する。すなわち彼は、進歩といっても実は装飾が変わっているだけで、新しいものなど何も生じておらず、前に進んでなどいないということをこの言葉で表現したのである。同論の中でクラウスは、「進歩は電話を生み出しはしたが人間の会話の質を変えることはなかった」とも述べている。またアメリカ人探検家ピアリーによる北極点到達に触発され書かれた論説「北極の発見」（F287: 1-14, 1909）においてクラウスは、「進歩は人皮から財布を作り出した」と、まるで三〇数年後を予見させるかのような警句を吐いている。すでに先行研究が明らかにしているように、この時期のクラウスには楽観的進歩主義とは正反対の、テクノロジー懐疑主義や文化的ペシミズムの徴候が色濃く見られる[53]。ロースにとって装飾の否定が、後進性からの脱却としての進歩を意味していたとすれば、クラウスにとっては「装飾」こそが悪しき進歩のメルクマールだったということができるのである[54]。装飾の否定はむしろ近代批判のベクトルを向いていた。

　ではクラウスはこの装飾――中でもクラウスにおいては言葉の装飾たる常套句が最大の問題であるわけだが――を

生み出す進歩への対抗軸として、何を自らの理念としていたのであろうか。クラウスは上述の「北極の発見」の中で、進歩とは「モラルと機械」を発明するものであり、人間から「自然（Natur）」を奪うものであると指摘している（F287: 11, 1909）。人は進歩によって「エレメンタルな諸力」を「理性の王国」に変えようとする。しかし北極の発見に象徴されるような進歩の自然に対する勝利とは無益な「ピュロスの勝利（Pyrrhussieg）」に過ぎない。勝利を誇る人間に対し、自然は地震や台風で応えるし、人間が征服したと思い込んでいる自然の底には「火山」が控えているのだ、とクラウスは警告する。すなわちクラウスにとって進歩への対抗概念の一つは「自然」だったといえるのである。そしてクラウスにとっての自然とは、単なる人間の外界を意味するだけではなく、人間の内なる自然、すなわちセクシュアリティの問題（先ほどのロース＝フロイトの議論からすれば、衝動、欲動の問題）を意味していた[55]。ここからクラウスの議論の心理学的な含意が重要となってくる。

『ファッケル』創刊初期のクラウスがまず時代批判として取り組んだのは、一九〇二年の論文「道徳と犯罪」（F115: 1-24, 1902）によって口火を切られ、一九〇八年に同名の著書[56]にもまとめられた、同時代のウィーンにおける「セクシュアリティ」と道徳裁判をめぐる問題であった。同著において扱われているのは、夫の家庭内暴力に耐え切れず不貞を働いた女性の裁判（F115: 1-24, 1902）、その男性遍歴が田舎町で噂となった結果夫が自殺し重婚容疑で拘禁された女性の裁判（F165: 2-12, 1904; F168: 1-20, 1904）、少年に性教育を施した廉で逮捕された大学教授の裁判（F187: 1-28, 1905）など、当時オーストリアで広く行われていた道徳裁判であり、さらに夫を捨て愛人の騎兵中尉のもとへ走ったがゆえに精神病を宣告され監禁されたベルギー皇女ルイーゼ・フォン・コーブルクの事件（F166: 1-21, 1904）など、当時のオーストリアで起こった様々なセクシュアリティと権力をめぐる問題である。

この議論の中でクラウスが批判を加えるのは、女性のみに処女性や貞淑といった性道徳を押し付け、同時に自らは売春婦を必要としながら社会道徳としてそれを非難する男性的＝家父長的な市民社会の二重道徳であり、この二重道

徳によって人々を裁く道徳裁判であり、さらには裁判を通じ性生活という私的領域をセンセーショナルに報道するプレスである。クラウスが進歩の発明品として「モラル」を批判する理由は、そうしたモラルが人間の自然を歪めていると考えていたからなのである。それゆえ批判は「女だけを道徳法で裁く道徳裁判官」へと向けられ、「道徳という法益は幻影であり、〈道徳〉と刑事裁判は何も関係のない」ことが主張される（F115: 7, 1902）[57]。不道徳であることは犯罪ではない。女性の性的自由や中絶、さらに男性も含めた同性愛が道徳＝法によって厳しく制限されていた時代に、クラウスはその道徳＝法を厳しく批判した。他人の私的領域を暴きだし道徳的非難を加える道徳裁判を、クラウスは中世の魔女裁判を思わせるものと批判しているが、この時代錯誤がプレスという近代テクノロジーの力を借りて被告人たる女性をより苦しめていることもクラウスは問題視している。「魔女裁判の技術はジャーナリズムという黒い術（Schwarzkunst）の発明により前代未聞の改良を遂げた」（F168: 2, 1904）[58]。人間の自然を抑圧しようとする市民社会的モラルとテクノロジーの産物たるプレスの共存への批判、すなわち進歩の発明たる「モラルと機械」への批判が、議論の軸をなしているのだ。

当時こうしたクラウスの議論を、賛辞を持って受け入れた知識人の一人がフロイトであった。上述の重婚容疑をかけられた女性の裁判を批評したクラウスの論文「ハーヴェイ事件」（F165: 2-12, 1904）を読んだ感想を、フロイトは一九〇四年一〇月にクラウスに向けて――自らを「そんなにしばしばあなたの支持者であることができない一人の読者」と呼んで、若干留保をつけつつも――次のように書き送っている。

> あなたのハーヴェイに関する記事が知らしめている、洞察、勇気、小さなものから大きなものを見出す能力に対して、（私＝フロイトは――引用者注）賛辞を送りたいと思います（F257-258: 40, 1908）。

フロイトはクラウスと一九〇八年頃にかけて親しく、特に一九〇六年には『ファッケル』を送ってもらったことへの感謝や後に『道徳と犯罪』に所収される論説「リール事件」（F211: 1-28, 1906）への賞賛などを記したクラウス宛のフロイトの書簡が六通確認されている[59]。この頃のフロイトの著作である『機知』（一九〇五年）や『「文化的」性道徳と現代の神経質症』（一九〇八年）にはクラウスからの引用やクラウスへの言及が見られる[60]。当時フロイトは『ファッケル』の定期的な読者であった[61]。

こうしたフロイトのクラウスに対する評価の理由は、彼の学説とクラウスの議論が一部合致するとフロイトが考えたからであった。例えばフロイトは『「文化的」性道徳と現代の神経質症』において、支配的な文化的性道徳、すなわち一夫一婦制のもとで生殖のみを目的とするような性道徳による性の有害な抑えこみが、神経質症の原因になると論じている。同論の中でフロイトは幾分挑発的に、「結婚がもとで起こる神経質症に対する治療薬は、むしろ姦通（eheliche Untreue）ということになるのかもしれない」と述べる[62]。支配的な性道徳を嘲弄し、女性の性的解放を主張するクラウスは、当時のフロイトの目には自らの共闘者と映った。一方でクラウスも同性愛問題を扱った「子ども好き」（F187: 1-28, 1905）という論説において、「われわれはジークムント・フロイト教授とともに、同性愛者が刑務所に入るべき人間でも、精神病院に入るべき人間でもないことを認める洞察と勇気を持つべきだ」とフロイトの名に言及しながら自説を述べている（Ibid.: 21）[63]。前章で言及したロースとフロイトの議論の並行性からも読み取れるように、三者の議論は世紀末ウィーンの「セクシュアリティ」をめぐる同じ言説圏内で展開していた。

だが同じ言説圏内で展開されていたとしても、クラウスとロース、あるいはフロイトの議論の間には差異が見出せることもまた事実である。例えばクラウスの議論は、公的領域からセクシュアリティをめぐる私的領域を守り、女性の性的解放や同性愛の社会的認知を求めたある種のリベラルな議論のようにも見えるし、実際そうした機能も果たしたと思われる。クラウスはこの問題で国家が果たすべき役割は「衛生・意志の自由・未成年者保護」の三点だけであ

るべきだと主張し、それ以外の国家干渉を拒絶した（Ibid.: 19）[64]。しかしクラウスをこの時期ウィーンでも運動が始まっていたリベラル・フェミニストの系列に置くことはできない。というのも、クラウスは女性の性的解放は語っても、決して「女性とモード」におけるロースの議論のような女性の「社会・経済的解放」については語らなかったからだ[65]。

クラウスが重視したのは、あくまで「女の官能の自決権（das Selbstbestimmungsrecht weiblicher Sinne）」（F166: 21, 1904）[66]であり、セクシュアリティという女性の「自然権」（F211: 24, 1906）であった。クラウスにとって女性のセクシュアリティという「自然」は文化の生成の源であって、彼は「女性の美的向上は、倫理的低下という不利益以上に、文化に利益をもたらした」（F166: 17, 1904）[67]と主張している。クラウスは女性のセクシュアリティが解放され、その性的魅力が増すことで、それに刺激を受けた文化の向上が起こると考えていた[68]。彼が求めたのは、あくまでこの文化、芸術の源として女性の「自然」の解放であった。エドワード・ティムズの表現を借りれば、クラウスは「女（Weib）の官能性の解放」を目指したのであって、「女性（Frau）の社会的解放」には反対した[69]。だからクラウスは「女性の政治的選挙権を重要なものとみなし、女性の性的な選挙権の剝奪に同意する女権論者（傍点引用者）」（F211: 20, 1906）[70]と、フェミニズムを茶化すような議論も行っている。ロースの議論が女性を男性の地位に引き上げることによって「装飾＝（男性の）抑圧されない衝動」の除去を目指すものであり[71]、フロイトの議論が神経質症を発症させない形での欲動の抑圧を目指すものであった一方で[72]、クラウスの議論は女性の官能性＝自然の解放による市民社会への異議申し立てをあくまで目指すものであったということができるのである。

さらに『道徳と犯罪』以降、『ファッケル』誌上に発表され、後に彼の著書『万里の長城』（一九一〇年）、『黒魔術による世界の没落』（一九二二年）へとまとめられることになる諸論稿の中には、「白人・男性」の支配する「市民社会」に対し、人間の「自然」により近い存在として「女性」に加えてさらに「有色人種」を対置させる議論を数多く

見出すことができる。[73] クラウスからすれば、女性同様有色人種こそ「文化に新しい精気を吹き込む」主体であった（F354-356: 3, 1912）。[74] つまり『道徳と犯罪』に収められた議論の連続線上にあるものとして、クラウスはセクシュアリティ（＝自然）を抑圧し、道徳裁判を行うと同時に人種差別を行う白人＝男性＝市民社会への異議申し立ての主体を、その社会で貶められている女性と有色人種に置いたのである。女性の性的自由を擁護するために一九〇二年に始まったクラウスの市民道徳批判は、当初の射程を超えて、有色人種と女性の結合、すなわち「追放された自然の諸力」（F285-286: 7, 1909）[75] を神経症的に恐れる白人男性の不能を嘲るという形をとるにいたった。ロースやフロイトの議論が――ロジックとしては――白人＝男性＝市民社会という図式を前提として進められているとすれば、クラウスの議論は有色人種＝女性＝自然をめぐって進められていたと考えることができる。クラウスとロースの議論はその心理学的含意においても、このような違いを見出すことができるのである。

四　まとめ

さてここまで見てきたように、クラウスとロースの議論はその「政治・社会（学）」的側面においても、「心理（学）」的側面においても種々の相違点が見出せるものであった。ロースの考えとは異なり、クラウスにとっての装飾批判は決して進歩主義を意味しなかったし、また彼にとっての装飾とは衝動の抑圧がもたらした近代社会の産物であった。彼はそれへの批判原理として人間の内的自然の解放を語り、その主体に女性と有色人種を据えたのである。クラウスは女性の内的自然や有色人種といった、白人＝男性＝市民社会の「外部」の諸力を梃子にすることで、彼が没落の途上にあると考えた西洋文明を再活性化しようと考えていた。

しかしこうした彼のロジックに問題がないわけではない。クラウスの市民社会批判は、女性や有色人種を自然的、

性的存在として捉えてその解放を肯定的に論じるもので、それは文明／野蛮、西欧／非西欧、純潔／退廃といった二項対立の強調点をひっくり返しただけの議論のようにも読める。地震、中国人、女性を市民社会に対する復讐を遂げる主体と見るエッセイ「万里の長城」（F285-286: 1-16, 1908）[76]などはそうした例の典型といえよう。こうした二項対立的言説に留まる限り、その言説が内包する差別の構造から抜け出すことができないという批判はもちろんなされうる。[77]

とはいえ、クラウスの議論が単なる二項対立の裏返しに留まらないものを含意していることもまた事実である。例えばクラウスが有色人種は自然に近いと主張する場合の「自然」には、野蛮や未開という意味ではなく、より人間精神の肯定的な意味が込められており、例えばクラウスはドイツ人のプレス編集長よりも黒人のほうが「知性」、「信頼性」、「善性」があると論じる（F384-385: 43, 1913）[78]。こうした観点は彼が一次大戦後に書き上げた反戦戯曲『人類最後の日々』にも見られ、好戦的説教をするプロテスタントやカトリック聖職者が登場する場面を続けた後に、クラウスはコンスタンティノープルのモスクを舞台に、モスクの中で大騒ぎをするベルリンの商社の若者とイマームを対置し、イマームに次のようにいわせる。

> 神はヨーロッパ人に学問を与え、東洋人には品位を与えた。ヨーロッパ人というのは至高の神の影を歩むわれわれがなるところのものとは違うのだ（三幕一九場）[79]。

クラウスからすれば学問による進歩を突き進め、戦争を遂行するヨーロッパ人＝白人男性は最も「自然」から乖離しており、それゆえ逆に理性も品位も欠けていると捉えられているのである（クラウスはバルカン戦争批判の文脈でも、勝利に浮かれる西欧人と敬虔なムスリムの対比を行っている［F360-362: 52, 1912］）[80]。それゆえひたすら西欧型の近代化を進める日本は、非西欧でありながら悪しき近代の典型として批判され、一次大戦期にはプロイセンのオーストリアに対す

る態度と日本の中国に対する態度が並列的に批判されている（F484–498: 1–12, 1918）。

同様に女性に関しても、クラウスが女性の自然を擁護したのは退廃を擁護するためではなく[81]、文化を生み出す根源の力としての「自然」の擁護にあった。このセクシュアリティをめぐる論争の後に始まった一次大戦の最中、クラウスは市民社会の旧弊な道徳と進歩、テクノロジーの両立、そして帰結としての大戦を厳しく批判していくことになる[82]。それゆえ『道徳と犯罪』における女性観、「自然」観は一次大戦批判にも用いられた。例えばクラウスは大戦中に華美な服装を「今はカーニヴァル中ではないんだ」と警察に咎められた女性と軍服を着て前線から報道を行う女性を対置させ、現状を「悲劇的カーニヴァル」であると評した同名の寸評（F426–430: 35–39, 1916）や、スカートを捲り上げて歩いていたのを道徳感情を損ねるものだと告発された女性に関する新聞記事を引用して自ら「スカートを上げよ、武器を捨てよ」とコメントを付した「道徳の系譜学」（F431–436: 40–41, 1916）などの寸評を『ファッケル』誌上に掲載している。高度テクノロジーによって戦いを行う前線に対し、銃後では純潔なるドイツの母、娘というロマンティックな市民社会的女性観が平時以上にのさばり、女性の内的自然を脅かしていた。クラウスからすれば旧弊な市民道徳を掲げながら、進歩したテクノロジーを使って戦争を行う白人男性の方こそ「電気に照らされた野蛮人」（F285–286: 15, 1908）[83]だったのである。

確かにプファビガンのような研究者が指摘するように、戦前のクラウスの議論に文化ペシミズムやテクノロジー批判といったある種の保守的要素が見られることは事実である。しかし本論が明らかにしたように、クラウスの保守性といわれる要素は彼のウィーン社会批判、旧弊な白人＝男性＝市民社会批判を展開する際に遺憾なく発揮された。ロース・ハウスの擁護や女性の性的解放の支持、同性愛の認知といったクラウスのアヴァンギャルド的な言論活動を支えたロジックは、進歩に対する深いペシミズムであり、人間の内的自然の解放を目指すという意味での近代批判であった。そしてここで示唆したように、このロジックがハプスブルク帝国最大にして最後の政治的危機であった一次

大戦批判において「展開」していくことになるのである。(84)

＊本論においてクラウスが発行していた雑誌 *Die Fackel* からの引用は F と略記し、本文中に号数、頁数、発行年の順に記載した。

＊クラウスの著作集は Christian Wagenknecht が編集した Suhrkamp 版を用いた。

（1）Adolf Loos, Die Potemkin'sche Stadt, in: *Die Potemkin'sche Stadt. Verschollene Schriften 1897–1933*, Wien, 1997, S. 55–58（『装飾と犯罪』伊藤哲夫訳、中央公論美術出版、二〇〇五年、四二―四八頁）.

（2）「クラウスとロース」を主題として論じたものとしては以下の研究を参照した。Dagmar Barnouw, Loos, Kraus, Wittgenstein, and the Problem of Authenticity, in: Gerald Chapple and Hans H. Schulte (ed.), *The Turn of the Century*, Bonn, 1981, pp. 249–273; Edward Timms, Façade and Function: The Alliance with Adolf Loos, in: *Karl Kraus, Apocalyptic Satirist, Culture and Catastrophe in Habsburg Vienna*, Yale University Press, 1986, pp. 115–128; Alfred Pfabigan, Urne und Nachttopf. Ornamentkritik als Gesellschaftkritik, in: *Geistesgegenwart. Essays zu Joseph Roth, Karl Kraus, Adolf Loos, Jura Soyfer*, Wien, 1991, S. 50–84; 山口裕之「カール・クラウスとアードルフ・ロース――装飾批判と進歩」『地域文化研究』第三号、一九九一年、五一―七三頁; Gilbert J. Carr, The 'Habsburg Myth', Ornament and Metaphor: Adolf Loos, Karl Kraus and Robert Musil, in: *Austrian Studies*. vol. 15, Austrian Satire and Other Essays, 2007, pp. 65–79.

（3）Carl E. Schorske, *Thinking with History: Exploration in the Passage to Modernism*, Princeton University Press, 1998, p. 163（「ウィーンにおける反逆」安井琢磨訳、『くるめす』第九号、岩波書店、一九八六年、一六一頁）; Allan Janik and Stephen Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, New York, 1973, p. 93（『ウィトゲンシュタインのウィーン』藤村龍雄訳、平凡社ライブラリー、二〇〇一年、一五一頁）.

（4）Timms, *Karl Kraus*, p. 117.

（5）Timms, *Karl Kraus*, p. 117; Pfabigan, Urne und Nachttopf, S. 52.

（6）この点については、注（2）の文献の内、特にプファビガンと山口の研究が重要である。

（7）ロースの伝記は邦語でも既に以下の二冊が存在する。伊藤哲夫『アドルフ・ロース』鹿島出版会、一九八〇年。川向正人『アドルフ・ロース――世紀末ウィーンの建築言語ゲーム』住まいの図書館出版局、一九八七年。

（8）Adolf Loos, *Ins Leere Gesprochen 1897–1900*, 1921=1981, Wien; *Trotzdem, Gesammelte Schriften 1900–1930*, Wien, 1931=1997; *Die Potemkin'sche Stadt. Verschollene Schriften 1897–1933*, Wien, 1983=1997. 邦訳はこの三冊から二六本の論文を選び出して訳出した、『装飾と犯罪――建築・文化論集』（伊藤哲夫訳、中央公論美術出版、二〇〇五年）に加え、*Ins Leere Gesprochen* の全訳である『虚空へ向けて――アドルフ・ロース著作集1』（加藤淳訳、アセテート、二〇一二年）がある。

（9）Loos, Ornament und Verbrechen, in: *Trotzdem*, S. 78-88（『装飾と犯罪』九〇―一〇四頁）.

（10）Loos, Ornament und Verbrechen, S. 79（『装飾と犯罪』九二頁）.

（11）Loos, Ornament und Verbrechen, S. 80（『装飾と犯罪』九二頁）.

（12）Loos, Ornament und Verbrechen, S. 88（『装飾と犯罪』一〇四頁）.

（13）Mark Anderson, The Ornament of Writing: Kafka, Loos and the Jugendstil, in: *New German Critique*, Number 43, Winter 1988, p. 135.

（14）このように各都市で同論文は朗読されたが、一九二九年一〇月に『フランクフルト新聞』に掲載されるまで印刷物の形で刊行されることはなかった。草稿がいつ書かれたのかについては議論があるが、一九〇八年頃書かれたという通説に対し、クリストファー・ロングは綿密な考証を行った上で一九〇九年末から一〇年初頭の間に書かれたと推測している（Christopher Long, The Origins and Context of Adolf Loos's "Ornament and Crime", in: *Journal of the Society of Architectural Historians*, vol. 68, no. 2, 2009, pp. 200-223）。

（15）この点については、川向『アドルフ・ロース』一六六頁；Timms, *Karl Kraus*, p. 126; Janik and Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, p. 100（一六三―一六四頁）参照。

（16）ロースは一八九八年に書いたエッセイ「デラックスな馬車」の中で次のように述べている。「ある民族の文化のレベルが低ければ低いほど、それだけやたらと装飾や装身具をつかいたがるものである。インディアンはあらゆるもの、ボートや舵、矢にまで装飾を施す。それゆえ装身具を好むということは、インディアン的立場にあるということだ。われわれの内なるインディアン性は、しかし、克服されねばならないものである」（Loos, Das Luxusfuhrwerk, in: *Ins Leere Gesprochen*, S. 97

［『装飾と犯罪』一八頁、『虚空に向けて』一二三頁］）。

（17）Loos, Architektur, in: *Trotzdem*, S. 92（『装飾と犯罪』一一〇頁）. Long, The Origins and Context of Adolf Loos's "Ornament and Crime", pp. 213-214.

（18）Loos, Ornament und Verbrechen, S. 80（『装飾と犯罪』九三頁）.

（19）「アメリカがいかに強く彼の世界像を刻印していたか、もしくは、アメリカの価値観がどれほど彼の気質に適い、のちに彼を多くの面でウィーン文化に対立させることになったか、このことは強調してもしすぎることはない」（ヴァルター・ループレヒター「アドルフ・ロースとウィーン文化」安川晴基訳、『虚空に向けて』二七四頁）。

（20）Adolf Loos, Aus den beiden Nummern von "Das Andere", in: *Trotzdem*, S. 21-53. 同誌について伊藤哲夫は次のように解説を加えている。「なおオーストリアは西欧の国であるのに、なぜ〈西欧文化をオーストリアに移入する〉必要があるのか、といった点についてだが、当時先進国であり、都市化が進んだ他の西欧の国々（特にイギリス、それにアメリカも含めて）の生活を見聞したロースの眼には、〈周縁〉に位置するといってよいオーストリアは文化の面でまだまだ後進国と映ったからであろう。この二号発行された小冊子において、ロースは、食事の際のマナーの問題、服装の問題、料理の問題等々、日常生活のこと細かな点について考察をし、オーストリアの後進性を指摘し、そして〈近代的〉とは何かと説く。啓蒙主義的な面が強かったロースがここにも見られる」（伊藤「訳注・解説」『装飾と犯罪』二三二頁）。

（21）Pfabigan, Urne und Nachttopf, S. 66.

（22）Loos, Die Herrenmode, in: *Ins Leere Gesprochen*, S. 57（『虚空に向けて』六九頁）.

（23）「（ロースの議論は――引用者注）パプア人（あるいは彼の他のエッセイではアメリカ・インディアン）はヨーロッパ人と比べて文化的に劣った段階にあるという前提から出発し、それとパラレルに、オーストリアの後進性を指摘しつつ、アメリカにおいて体現されている（とロースが捉えた）近代性を志向する」（山口「カール・クラウスとアードルフ・ロース」五五頁）。

（24）Carl E. Schorske, *Fin-de-siecle Vienna. Politics and Culture*, New York, 1983（『世紀末ウィーン――政治と文化』安井琢磨訳、岩波書店、一九八三年）.

（25）Pfabigan, Urne und Nachttopf, S. 65.

（26）Loos, Zwei Aufsätz und eine Zuschrift über das Haus auf dem Michaelerplatz, in: *Trotzdem*, S. 114（『装飾と犯罪』一一四

頁）.

(27) Loos, Ornament und Verbrechen, S. 87-88（『装飾と犯罪』一〇三頁）.

(28) Loos, Architektur, S. 101（『装飾と犯罪』一三〇頁）.

(29) Loos, Ornament und Verbrechen, S. 78（『装飾と犯罪』九一頁）.

(30) 田中純『建築のエロティシズム――世紀転換期ヴィーンにおける装飾の運命』平凡社新書、二〇一一年、七九―八〇頁。

(31) Nike Wagner, *Geist und Geschlecht. Karl Kraus und die Erotik der Wiener Moderne*. Frankfurt am Main, Zweite Auflage, 1982, S. 59（『世紀末ウィーンの精神と性』菊盛英夫訳、筑摩書房、一九八八年、六二頁）.

(32) Sigmund Freud, Die "kulturelle" Sexualmoral und die moderne Nervosität, in: *Gesammelte Werke. Band VII*, Frankfurt am Main, Sechste Auflage, 1976, S. 149（「〈文化的〉性道徳と現代の神経質症」『フロイト全集』第九巻、道籏泰三訳、岩波書店、二〇〇七年、二五八頁）.

(33) ループレヒター「アドルフ・ロースとウィーン文化」二七七頁。

(34) Sigmund Freud, Das Unbehagen in der Kultur, in: *Gesammelte Werke. Band XIV*, Frankfurt am Main, Siebente Auflage, 1991, S. 457（「文化における居心地の悪さ」『フロイト全集』第二〇巻、嶺秀樹・高田珠樹訳、岩波書店、二〇一一年、一〇七頁）.

(35) Freud, Das Unbehagen in der Kultur, S. 449（『フロイト全集』第二〇巻、九九頁）.

(36) Freud, Das Unbehagen in der Kultur, S. 449（『フロイト全集』第二〇巻、九八頁）.

(37) Loos, Damenmode, in: *Ins Leere gesprochen*, S. 126-132（『虚空に向けて』一六一―一六九頁）.

(38) Loos, Damenmode, S. 128（『虚空に向けて』一六三頁）.

(39) Loos, Damenmode, S. 132（『虚空に向けて』一六七頁）.

(40) 例えば池内紀は、ロースと「女性とモード」について、「ヨーロッパにあっていち早く機能美に徹した建物をウィーンの中心街に実現した建築家は、その中で熱っぽく、〈官能美によってではなく、労働と才能によって男と対抗すべき女〉のことを説いている。つまりは女性が〈性〉から解放さるべきこと」と、その女性解放的含意を強調して解説を加えている（『道化のような歴史家の肖像』みすず書房、一九八八年、一〇五頁）。一方で田中純は、「女性とモード」における議論の中で「男性」の性衝動のみが問題とされ、その解決策が女性の男性化（もはや男性の性対象ではない女性）に過ぎない点に着

目し、ロース思想が含意する「女性の不在」という「反フェミニズム」を指摘している（田中純「破壊の天使――アドルフ・ロースのアレゴリー的論理学」『建築文化』六五七号、彰国社、二〇〇二年、九八―一〇一頁」ならびに『建築のエロティシズム』［特に第二章］）。

（41）Theodor W. Adorno, Funktionalismus heute, in: *Gesammelte Schriften, Band 10-1*, Frankfurt am Main, 1977, S. 380（「今日の機能主義」伊藤哲夫・水田一征訳、『哲学者の語る建築――ハイデガー、オルテガ、ペゲラー、アドルノ』中央公論美術出版、二〇〇八年、一四一頁）.

（42）田中純「装飾という群集――神経系都市論の系譜」『都市の詩学』東京大学出版会、二〇〇六―二〇七頁。

（43）Friedensreich Hundertwasser, Los von Loos. Gesetz für individuelle Bauveränderungen oder Architektur-Boykott. Manifest vom 9. 2. 1968, in: Otto Breicha und Reinhard Urbach (Hg.), *Österreich zum Beispiel. Literatur, bildende Kunst, Film und Musik seit 1968*. Salzburg, 1982, S. 68. このマニフェストはプファビガンも論文のエピグラフに用いている（Pfabigan, Urne und Nachttopf, S. 50）。

（44）Freud, Die "kulturelle" Sexualmoral und die moderne Nervosität, S. 148（『フロイト全集』第九巻、二五六頁）.

（45）Timms, *Karl Kraus*, p. 117.

（46）Kraus, *Schriften. Band 4*, S. 178-184（『黒魔術による世界の没落』山口裕之・河野英二訳、現代思潮新社、二〇〇八年、九六―一〇九頁）.

（47）ここでクラウスは髭を「フィユトン的付け足し、形容辞、常套句にすぎない」と装飾と同列において批判している。なおロースも講演「ポチョムキン風の都市」の中で、髭と装飾を同列に論じた（Loos, Mein Haus auf der Michaelerplatz, in: *Die Potemkin'sche Stadt*, S. 122［『装飾と犯罪』二四二頁］）。両者ともに髭を装飾の比喩として捉え、髭を剃ることを装飾の除去と関連付けている。

（48）Kraus, *Schriften. Band 4*, S. 427（『黒魔術による世界の没落』二八二頁）.

ここでクラウスが「パルジファル」と「クラクション」という対比を用いているのは、ロースのエッセイ「貧しき豊かな男」を念頭においているのではないかと思われる（*Ins Leere Gesprochen*, S. 198-203［『虚空に向けて』二五八―二六四頁］）。同論は日常のあらゆるものを唯美主義的芸術家にデザインさせたある金持ちが、あまりに生活が不便になって逆に不幸になる、という諷刺的な小噺であるが、その中でこの金持ちは、自分の家を装飾だらけにするのに飽き足らず、家の前を通る路

面電車のベルに「パルジファル」の旋律を用いるよう運営会社に申し入れる。

(49) ロース自身の主張の眼目もこの芸術作品の「純粋性」にあったと考えられる。岩下眞好「合理主義とエロス――文化史的コンテクストの中のアドルフ・ロース」(ハインリヒ・クルカ編『アドルフ・ロース』泰流社、一九八四年、一六七頁)。本論で後述するように、クラウスもロースも芸術作品の起源をエロティックな衝動に見ていたこと、そしてそこを源泉として生じる芸術作品の「純粋性」を擁護しようとしていたことでは共通する。ただしロースが衝動の垂れ流しとして装飾を批判したのに対し、クラウスは装飾的なものを必要とする近代社会を、衝動を抑圧するものと批判した。二人は目指すべきゴールを共有しながら、そこに向かう道のり、論理に違いがあったということができる。ここに二人の「装飾」観の相違も読み取れる。

(50) Timms, *Karl Kraus*, pp. 121-123.

(51) Kraus, *Schriften. Band 2*, S. 197-203(「進歩」原研二訳、池内紀編『ウィーン聖なる春』国書刊行会、一九八六年、二六二―二六八頁).

(52) 「変転する装飾」は原研二の訳語(『ウィーン聖なる春』二六二頁)である。なお山口裕之は同語を「回転舞台装置」と訳している(山口「カール・クラウスとアードルフ・ロース」六二頁)。

(53) クラウスの一次大戦前における保守性の重要な要素として「テクノロジー懐疑主義」を挙げるプファビガンは、その証左として、ここで引用したクラウスのアフォリズムを挙げている(Alfred Pfabigan, *Karl Kraus und der Sozialismus*, Wien, 1976, S. 151)。

(54) 例えば山口は次のように書いている。「ロースは、実用品から装飾をなくしていくこと、実用品と芸術とを区別することが〈文化の進展〉を意味し、それが〈近代人〉のとるべき当然の態度であると繰り返す。それに対してクラウスにとっては、〈装飾〉はむしろ〈進歩〉や〈近代化〉の産物であり、これらは〈精神の破壊〉の責めを負う」(山口「カール・クラウスとアードルフ・ロース」六四頁)。

(55) 「クラウスにとって守るべき〈自然〉とは単なる外的環境ではなく、芸術家の精神性、また彼の女性観によればその源泉となるべき女性の官能性という〈本性〉、人間の内的〈自然〉でもあった」(山口「カール・クラウスとアードルフ・ロース」六五頁)。

(56) Kraus, *Schriften. Band 1*(『モラルと犯罪』小松太郎訳、法政大学出版局、一九七〇年).

(57) Kraus, *Schriften. Band I*, S. 14（『モラルと犯罪』八頁）.
(58) Kraus, *Schriften. Band I*, S. 106（『モラルと犯罪』七四頁）.
(59) Thomas Szasz, *Anti-Freud: Karl Kraus's Criticism of Psychoanalysis and Psychiatry*, 1976=1990, Syracuse University Press, pp. 20–21.
(60) Sigmund Freud, Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten, in: *Gesammelte Werke*, Frankfurt am Main, Siebte Auflage, 1987, S. 26（「機知――その無意識との関係」中岡成文・太寿堂真・多賀健太郎訳、『フロイト全集』第八巻、岩波書店、二〇〇八年、二六頁）; Freud, Die "kultuelle" Sexualmoral und die moderne Nervosität, S. 163（『フロイト全集』第九巻、二七三頁）.
(61) Timms, *Karl Kraus*, p. 95.
(62) Freud, Die "kultuelle" Sexualmoral und die moderne Nervosität, S. 158（『フロイト全集』第九巻、二六八頁）.
(63) Kraus, *Schriften. Band I*, S. 184（『モラルと犯罪』一三九頁）.
(64) Kraus, *Schriften. Band I*, S. 182（『モラルと犯罪』一三七頁）.
(65) クラウスの議論が持つ反フェミニズムの要素を指摘する先行研究は数多い。Janik and Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, pp. 70–75（一一三―一二〇頁）; Timms, *Karl Kraus*, pp. 64–68; 山口裕之「『道徳と犯罪』における芸術家カール・クラウスの視座」『地域文化研究』第一号、一九九〇年、一三四頁。
(66) Kraus, *Schriften. Band I*, S. 93（『モラルと犯罪』五九頁）.
(67) Kraus, *Schriften. Band I*, S. 90（『モラルと犯罪』五六頁）.
(68) クラウスの議論における、女性の性的解放と文化発展の関係については、先に掲げた山口「『道徳と犯罪』における芸術家カール・クラウスの視座」が詳しい。
(69) Timms, *Karl Kraus*, p. 71. ニケ・ワーグナーも世紀末に好んで「女性（Frau）」と「女（Weib）」が対立概念として用いられたことを指摘し、クラウスが「女」、「ファム・ファタール」の側に立っていたことを強調している（Wagner, *Geist und Geschlecht*, S. 132 ff.『世紀末ウィーンの精神と性』一四一頁以下）。
(70) Kraus, *Schriften. Band I*, S. 244（『モラルと犯罪』一七七頁）.
クラウスはこの次の号の『ファッケル』（F212: 27, 1906）でも「女権論者たちは、女の自然権のために闘う代わりに、

女たちを反自然（Unnatur）へと縛り付けることに躍起になっている」と書いている。

（71）ロースの「女性のモード」における議論とクラウスの女性論が異なるものであるということを指摘した研究として以下を参照。Timms, *Karl Kraus*, p. 85; Pfabigan, Urne und Nachttopf, S. 83.

（72）クラウスとフロイトの議論の違いについては Wagner, *Geist und Geschlecht*, S. 128–131（『世紀末ウィーンの精神と性』一三六―一三九頁）を参照。

（73）この問題は、藪前由紀「カール・クラウスの『黒人』――世界文化の〈主体〉としての黒人」（『独逸文学』第四四号、二〇〇〇年、二二七―二四九頁）を参照。

（74）Kraus, *Schriften. Band 4*, S. 326（『黒魔術による世界の没落』二四〇頁）.

（75）Kraus, *Schriften. Band 2*, S. 285（『ウィーン聖なる春』二九七頁）.

（76）Kraus, *Schriften. Band 2*, S. 280–293（『ウィーン聖なる春』二九一―三〇五頁）.

（77）だがこの問題に対し、例えば藪前は次のように述べている。「ともすればクラウス自身が〈白人文化〉は〈品格〉があり、〈黒人文化〉を〈野蛮〉と見做し、文化を二項対立的に概念化していたと思われがちである。しかしそれも同時代人の間で既に定着していた固定観念や社会通念を、クラウスが著作の中で意図的に使用したと思われる（クラウスはそれほどの言語感覚のある批評家であった）」（「カール・クラウスの『黒人』」二四三頁）。

（78）Kraus, *Schriften. Band 4*, S. 306（『黒魔術による世界の没落』二三三頁）. この点についても藪前「カール・クラウスの『黒人』」二四〇―二四一頁を参照。

（79）Kraus, *Schriften. Band 10*, S. 361（『人類最後の日々（上）』池内紀訳、法政大学出版局、一九七一年、三二九頁）.

（80）詳細は藪前由紀「カール・クラウスと第一次バルカン戦争――『ファッケル』におけるオスマン帝国の衰微」（『独逸文学』第四一号、一九九七年、一一四頁）を参照。

（81）Timms, *Karl Kraus*, p. 85.

（82）山口も「まさに戦争においてこそ、〈根源の言葉〉の圏内に属する〈精神〉、〈ファンタジー〉そして〈自然〉が、〈ジャーナリズム〉また〈文明〉、〈近代技術〉によって、最もはなはだしく損なわれ、破壊されているのをクラウスは見る」、と指摘する（「カール・クラウスにおける世界・言葉・性」（二）、『人文研究』第四五号、一九九三年、一一八頁）。

（83）Kraus, *Schriften. Band 2*, S. 291（『ウィーン聖なる春』三〇三頁）.

（84）この「展開」についての詳細は、高橋義彦「カール・クラウスと第一次世界大戦」（『法学政治学論究』第八六号、二〇一〇年、一三五―一六三頁）を参照のこと。

高橋　義彦（たかはし　よしひこ）
所属・現職　慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程
最終学歴　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程
所属学会　政治思想学会、社会思想史学会
専攻領域　政治思想史、オーストリア・ドイツ政治文化史
主要著作　「エリック・フェーゲリンのウィーン――オーストリア第一共和国とデモクラシーの危機」『政治思想研究』第一二号（二〇一二年）
「カール・クラウスと二つのファシズム」『法学政治学論究』第九二号（二〇一二年）